
恋愛メイク

木下芽衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛メイク

【Zコード】

Z8992E

【作者名】

木下芽衣

【あらすじ】

ヒリート校に通う見た目地味だけどおしゃれしてみたいと思ってる高1の女の子と見た目は不良だけど夢にむかっている純粋な男子と仲間達の笑いあり？涙もあり…（ないかも）感動ありの青春物語風にしてみました

田舎こなれキブン(汎)…? (前書き)

読んで頂けたらと思います!
頑張ります! ^ ^ ^ ^ ^

田舎こなぎやつ(六)…?

私は眠り姫

いつか訪れる王子様と恋をするの…

と夢見ていたのは遠い昔…

「委員長～～！これやつて

皆知れどこのこのスカート

ストレートな黒髪に

化粧氣のない顔、眼鏡小さい時から遊ぶ事がなく勉強ばかりしてき
たから、学年2位

すっかり委員長というあだ名になってしまった、この私。

椎名 紗織 高校1年生。

こここの高校は中学からの持ち上がりエリート校らしく、金持ちが行く高校（悪くいえば金さえいればどんな馬鹿でも入れる）。

でも一般入試の外部受験はトップクラスレベルの高校だ。

私は、先生や親に進められこの高校に受験し受かった。

親はあるエリート校に受かったと言つて自慢しているが..
周りは馬鹿だらけ！！これがエリート校だとは思えない！
絶対 金で入った奴ばかりだ！！！

「ちょっとは自分でしたら？」

「だつてわかんないんだもん！」

「確率も分からなくてどうすんの……」

ホントこの学校はおかしいよ……

先生

「委員長～ちょっといいかあ？」

「はーい!

後は自分でやつて」

「しょんな~」

先生

「はーこれー」

目の前にある大量のプリント用紙。
机に置いたときにドンッと効果音がなりそうだ。

「…」これを

「…」れを義務室にもつておいてくれ!」

「パシリですか…」

「頼まれてくれ

いまから会議があるんだ!」

「…分かりました」

断れなかつた…

にしても 重いな「レレキロあるんじやないの？！」

カサツ

ん？ なんか音する
プリント持つてるから前見えない

バサツ

飛んでいる

茶色い光沢のある橢円形は…
ゴキブリ…？！

「ひゃわや ややややーー！」

ヴァサバサア

「大丈夫か？！？」

「ムリ…」

「せり手貸してやるから

「ありがとお…」

見上げると

夕田と同じくらいい眼の髪、ワックスでつんつんにたたせてある
耳にピヤス

見るからに不良の姿が田の前にあつた。なんかわざから見られて
る気がする..

!

怒らしたのか?!

「すすすこません!」

「なにが?」

「見られたのがしたんで...
怒らしてしまいましたか?!」

「あ 違ひ違ひ」

よかつたあ

「...うなつといい?」

「はー?」

「おれの作品になつてみない?」

「せ~」

血分に春がくるなんていふとおせ思ひもしなかつた

変身カラクリ (前書き)

すみません！

前の文章で黒髪だけでしたがござ正確には
長い黒髪です。

「めんなさい……」

変身をせぬやうへ

「オレの作品になつてみない?」

「は?」

何言い出すんだこの人…
私を作品つて…?

「その間はO.Kで事?」

パチンッ

指をならすと一人の男の人気が現れた!?

「彼女をSRに」

「かしこまりました」

男の人に抱き抱えられた

「ちょ!

まだ何も」

何も言つてないのに

車の中

れつも無理矢理押し込められたのだ

…にしても高級車の中はホントに車なのかと思つほど豪華で広い!
ここで生活出来そうだ

「おこー.」

「へ?」

「着いたぞ」

「すこませんつ

「いじりちね

彼に着いていくと

可愛らしい部屋にたどり着いた

「かわあいい！」

「それはよかつた」

「なんでこんな所に私を？
と言つより名前は？」

作品つて？」

「待つた！」

そんなに質問攻めだとわかんなくなるからー。」

「俺の名前は優雅
優雅つて呼んで
君は椎名紗織ちやんでしょ？」

「何で？名前…」

「…いつも2位の所に書いてあるか
それと紗織て名前
似合つてる」

名前で褒められたの初めて…
なんか照れる

「ありがとう…
じゃあなくてー！」

「分かつてゐつて
作品つて何かでしょ？」

私は頷いた

「それは…

変身させる事…」

「へ？」

「紗織ちゃんて化粧してないしおしゃれ氣全然ないじやん
だからおしゃれモード全開のかわいい女の子に変身させたげる」

おしゃれに興味をもつていた私
ずっとしたいなと思つても自分には似合わないこと思つて遠ざけ
てきた

この人についていけば変わるかもしれない…

「やります」

「んじゃあ

交渉成立ー。」

「 ゆりしへね紗織ちゃん

「 ゆりしへ優雅君」

私達のふしぎな関係の始まり始まり～

変身わせむやうへる（前書き）

遅くなつてすみません宿題に追われていました

変身少女ひめづる

優雅

「説明しどくね」

?

優雅

「俺を代表とした4人組のグループで活動してるんだ」

ガチャ

後ろのドアが開いた

「ゆーうー

いきなり呼ばないでくれる?

せっかくデートしてたんだから~」

紗織

「あつ!

小西さん!（1話で数学してた子）

「あつ！」

委員長～（^ ^）」

「あつ
ホントだ

委員長だあ」

「東君もつ（委員で同じ）」

優雅

「紹介しよう

女のほうが

小西麻由

通称麻由

ファッショノ担当で

そのイケメン君は

東虎乃助

通称トラ

ネイル担当」

んで

「もう一つ言つとくとトラはフランスとのハーフで
甘い顔立ちで女子に
人気だけど

人気だけど

小さい時

姉ちゃん達に襲われてから女子恐怖性になつたんだって
麻由はそれを知つてるけどトラのこと大好きでいつも追いかけてる
今さつき言つてたデートやらも
トラを追いかけてたんだろうね～

「これで分かつた?
(ゼイゼイ)」

紗織

「長い」説明ありがとう 優雅君

麻由
「てか

麻由のことストーカーみたいに言わないでくれるう?
ねートラ君?」

トラ

「うえ? (汗)

うん

頼むから

腕放して…

麻由

「やーだん
照れてる
かわいい」

優雅

「それは

完璧に嫌がってるぞ」

なんか濃ゆいな

あらが

いまどきの女の子?

てか

東君

私と話す時

普通なのになー

気のせいか?

優雅

トラ

「トラ

慧は?」

「ああ

トラ

「ああ

図書館に居たよ

呼んだから

もうすぐ来ると思つ

それと

優雅 助けてえ…

「優雅

「まだ

へばり付いてたのか
麻由！

いい加減放してやれ！」

麻由
「はあーい」

紗織

「小西さん

『慧』って？

また

同じクラスの人？」

麻由

「違うよ」

慧は一つ下の子

見た目は大人だけど

クソガキなの

てか

小西さんって堅いから麻由て呼んでえ
あつ まあーちゃんでもいいよ！」

紗織

「まあー」

麻由

「よろしくねー！」

麻由

あつ

笑顔かわいい

エクボが出来てて

トラ

「オレも

トラでいいよー！」

ガチャヤ！

「…」

麻由

「この子が

慧

湖南慧で

ヘアーダ担当だよー！」

けーい！

遅れた時は

「ごめんなさいでしょ」

慧

「つるやこ

厚化粧のおばさん

なんで

あんたの言ひ事聞かないといけないんだ

麻由

「キイイーーー（怒）殺つていい？！」

今

鬼が見えました

優雅

「ダメだろ？」

慧

「麻由に謝つて？」

慧

「…すみません…」

優雅

「よろしい

麻由だつて一応

年上なんだし

言つ事聞かないと」

麻由

「何その扱い?! 一応つて

優雅

「これでも

良くしたつもりだけビ?」

ギアースカ × 2

スゴい…

優雅君の事一瞬で

言つ事聞いた

紗織

「トヲ君」

リラ

「なに?」

紗織

「優雅君と慧君って

仲良いの?..」

トト

「んー

仲良いといえば

そうなるし

言わなければ

それでも

ないかもしないし……」

どうこいつこと?

麻由

「あーーー

あーちゃん

トトちゃん取らないでえー!」

紗織

「取りないけど(汗)…あーちゃんって?」

麻由

「あだねあ！」

紗織ちゃんだと
つまんないから
さーちゃんにした
ダメだった？」「

紗織

「ダメじゃな〜けど……」

麻由

「じりしたの〜。」

紗織

「委員長以外で呼ばれたの久しぶりだなあと思つて」

麻由

「そんな」とお (*^ ^*)

「いくらでも呼んだげる」

優雅

「は〜」

そこまで

優雅

「話盛り上がりがつてるとこ悪いけど
本題入るね」

あ そうだった

優雅

「俺 慧 トラ 麻由でスペシャル4略してS4というグループを
組んでるんだ
メイク・ヘア・ネイル・ファッショント
担当に分かれて
一人の女の子を変えていく活動だ」

麻由

「さーちゃんを
可愛くしてあげる
」

トラ

「大丈夫だつて」

慧

「…」

優雅

「といひことで

紗織“可愛くおしゃれモード全開の女子変身”開始!」

麻由・トヲ

「ながつ

私は どうこう風に
変わらるのだりづ?
楽しみだ

変身れせひや「へーべー」（後書き）

やつと

次回から紗織《変身》です

どんな風になるのか…まだ 自分でもわかりません(汗)

…頑張ります!

茹でタコ一人組～3～（前書き）

やつと
変身します！

茹でタコ一人組～3～

麻由

「まあ
私からね 服なんだけどお
どんな感じに
したい？」

紗織

「私は何でも……」

トヲ

「お姉様風が紗織ににあつてるんじゃないかな?
しつかりしてるし」

麻由

「そうだよねえ（上田遣い）

トヲ君は

お姉様風ファッション好き?」

トヲにすり寄り

腕をからませてる（汗）積極的だなあ
恐ろしいぐらいに…

トヲ

「えつ…

あうん…

あのお麻由さん

麻由

「何い?

愛の告白う?

トヲ

「放して…」

麻由

「いゝや(^ ^)

一生放さない…!

どこだつて

付いて来ちゃう(笑)

お家にだつて

トイレやお風呂…

キヤー…!-/ / / /

麻由困つちやう…

麻由わん…

それ 間違えなく犯罪デスヨ

優雅
「そこの変態
ストーカー女

トラがショックで

泡出して

氣絶してんぞ！」

麻由

「キャア—————！」

トラ君！——

：今のうち

襲っちゃおか

紗織・優雅

「ダメ！」

これは　トラ君じゃなくとも　逃げると悪い……

優雅

「なんか話がとんでもなくそれたけど
お姉様風で良いのか？何か着たいのある？」

紗織

「ん——」

麻由

「なんかある？」

紗織

「…いの着てみたい…」

優雅・麻由

「ん？」

紗織

「可愛いの着てみたい！－／／／

／／／／／

えつとつ

今まで自分には

似合わないと思って

ワンピースとか

ブラウスなんか

幼稚園あたりから
着た事ないし！！

ああつ

別に似合わないんだつたら別にいいんだよ！－／／／

…でも着てみたい…

ダメ？」

優雅

「いいよ

リクエストに応えない意味ないしね

それに…

一番したい格好している時の笑顔が

最高に可愛いんだから

うわ…

紗織

「どうしたの（汗）いきなりキザなセリフ吐いて…
なんか大丈夫？」

優雅

「ガーン！」

… 鈍感だな

イヤそれは前からだつたな…

?

麻由

「キヤハハ！」

さーちゃん最高

優雅かわいそー（^ ^）

まあ

それはいいや

んじや

服は可愛い系で！

たーちやん

こつち来てえ」

13

「ウルフ」

—

紗織

「……れはちようといやぐへ恥ずかしこよお———」

私は今

ピンクのTシャツワンピを着ている

麻由

「えー！」

すつゞじへ合つてゐよ」

紗織

「だつて……裾短い……」

麻由

「スタイルいいし足が超 キレイなんだから！
そこは出さないと！

はいこれ

ロングカーデ羽織つて？」

紗織

「うう…」



麻由

「優雅！

じゃじゃあーん！
さーちゃんで す！

↙(、 、 ↘)

紗織

「恥ずかしい…」

麻由

「ピンクのビビットカラーで
ロゴの効いているTシャツワンピに
シックなグレーのロングカーデをオンして
タイツを履かないず
素足で美脚を強調！」

足元は「ゴツ」、スニーカーにレッグウォーマーをはいてボリュームを
！！！

どうだ！！

麻由ちゃん特製コーデは……

紗織

「ど どん／＼／＼

変かな？」

トヲ

「変じやないよ（^ ^）似合つててスマイル可憐によー。
(トヲ)二つの間にか回復（笑）

麻由

「でしょ～

麻由とさーちゃん

どっちの方が可愛いい？」

トヲ

「…（苦笑）「

慧

「変態女より

そつちの方が

マシだろ

濃ゆくなくて「

（ずっといたが今まで一言も喋らざにいた慧くん（汗）てかどうで
イツどう扱えればいいか分からなかつたアホな作者
勘弁してやつてください）

麻由

「あんたに聞いてないしーー
てかさつきまで
無言だったのに
いきなり話しかけてくんnaーーー（怒）
：これ以上慧に言つても疲れるだけだ
優雅はどう？」「

：／＼＼＼＼

紗織

「／＼＼＼！

あつありがとお…」

ひや～～

恥ずかしい！

正面で大きい声で

言われたら

誰でも恥ずかしいよね！？

顔熱いし…

きっと

真っ赤なんだろうなあ私（笑）

麻由

「二人とも

顔真っ赤あ～

（ニヤニヤ）」

トラ

「スゲー顔赤いよ茹でたタ「みたい」

二人とも？
優雅君も？

チラツ

あ ホントだ

優雅

「うつさいなあ／＼／＼

ほらっ！

次トラの番だろ！－（怒）

トラ

「怒らないでえ…タダでさえおつかないんだから

んじや

さつそくやひうか

紗織

「／＼／＼はい」

まだ顔が

冷める間がないまま

次へ突入

私の変身は

まだまだ続く…

茹でタコ一人組～3～（後書き）

次は

トラ&・慧です！

ネイルは時間かからないんで：

トラの活躍は少ないかも（汗）
すみません（泣）

お姫様だつこーへ4

トラ
「ほい！出来た」

紗織
「わあ～！
この黄色のチェック柄すっごくかわいい～！斜めに半分だけって所
がいい！
スゴいね～
どうやって作るの？」

トラ
「んー？」

紗織
「えー 教えてくれたってこと思ひながら～。
誰にでも出来たら
オレ居る意味なくなるでしょ？
てか紗織結構
喋るんだね

学校じゃあ

スゴく静かたけど

紗織

「ホントは
喋りたいけど
私って見た目地味だから
喋るイメージないじゃん
いっぱい話して

皆に引かれたら
どうすんの？

だから

なるべく
話さないよう

してんの

てか

周りにいる人

大体アホ過ぎて

会話なんて出来るか

自信ないし！（＾＾）」

トラ

「そんな笑顔で…

結構グサツと来るよ

その言葉！

オレも

その一人すか…（泣）』

紗織

「ラ君は違つよーただ…」

トヲ

「ただ？」

紗織

「いつも

女の子達に

追いかけられてたから…

女の子達が…ね？」

トヲ

「…（ゾーッ）

女の子って怖いよね…」

紗織

「同じ女でも

あれは怖いですわ…

あれは「

トヲ
「だよな…!
よかつたあー!
仲間が居た!
友達に相談しても
羨ましいとしか

「言われた事なくてさあホントよかつたあ」

紗織

「追いかけられないと分かんないのかもね（笑）
モテる男の

勲章つてやつ？

てかさ

女の子苦手なのに
何で私大丈夫なの？」

トヲ

「さあ？

そういうえばそうだ

なんでだ？

…あつ！

紗織は他みたいに

追いかけたり

襲つてきたりしないからかな…！」

紗織

「普通は

そんなことしないよ…

たぶん」

ガラツ

麻由

「トーリーーん…会いたかつたあ～」

トラ

「ウワアア――――――――――」

びゅーん！

風の如く
走り抜けて行つたよ…
会いたかつたて…
一時間も経つてないのに…

紗織

「異常だ…」

「ホント異常だな
アレは
キショ魔性女」

紗織

「び
びっくりした！」

慧君か！

いきなりにも
程があるよーー！」

慧

「人の勝手だろ
なんでそんな事
言われないといけないんだ
てかもう終わつたんだろう?
次髪やるぞ
早く終らせたい」

この…（怒）

年下なのに
敬語も使わないで
生意気きな
でも
言つても
意味無さそうだしな…諦めよ

慧
「…」

紗織
「はいはい」

スタスタ

「行くんだ？」

あつ

なんか振り向いた

慧

「着いて来ないと
髪出来ないだろうが」

紗織
「は?

「それならちやんと言こなさこよー...
口もつてるんだから」

慧

「人と話すの嫌いなんだよ」

紗織

「何で?

「楽しい事もあるじやん」

慧

「俺と話

合わないんだ

紗織

「どんなの？」

慧

「あんたに関係ない」

今ならわかる

麻由のキモチ！（怒）腹立つ！

慧

「！」

目の前には

パームかける機械とかいっぱいある

紗織

「わあ…」

ホントに家の中なの？」

慧

「優雅兄貴が

用意してくれた

紗織

「やつぱり

金持ちなんだ

慧

「まあ

そんな事はいいや

ところで

長い髪だけど

髪の手入れに

どれだけ時間かける

紗織

「時間？

そんなの5分で

終わるよ

乾かすだけだし

慧

「！？

乾かすだけ！？

そんなんで

こんだけ艶のあつて
纏まりのあるけど

サラサラになるのか？！

紗織

「そんなに
スゴい事なの？」

慧

「スゲーよー

だって髪質が柔らかいから
手入れしないと
すぐにゴワゴワになるし
脂がないとパサパサでありますぎだとベトベトだぜ？」

普通

そこまでこするなり

最低でも

一時間は掛かるぜー

……あつ

/ / / / /

紗織

「なんだ

喋れるんじゃん…」

慧

「…笑うなら笑えよこいつも喋らなこやつがこんなに熱く語つたらお
もしりいんだろ？」

あ 慧君も私と
同じかも…

周りが決め付けた
自分の評価の枠に
はまつてしまつたんだ

紗織

「そんな事ないよなんとなく

わかるから

そのキモチ

！そうだ

私の前では

慧の本当の

自分でいていいよー」

慧

「は？何言つて…」

紗織

「わつ毛髪の毛の事になつたら
すつじく田がおらきらしてたんだからー。
楽しいんでしょ？
だつたら
楽しい方がいいでしょ？」

慧

「何分かつたような口聞いてんの？」

てか慧つて
呼び捨て？」

紗織

「何でもいいでしょ！」

私の事も

紗織つて呼んでいいからさ」

慧

「…アンタなんか

の名前なんか言わないキモい（笑）」

紗織

「何をーーー！」

慧

「はい

アンタはさ

パー、マ当ても

いい派？」

何か

ムシされてるし…

まあいいや

疲れたし

紗織

「うん

実はかけてみたないと
思つたんだよね～」

慧

「んじゅや

搖の巻で」

（～～～～～）

紗織

「この髪型好むー。」

慧

「 だろ？」

俺の作ったのは
他より上手いんだぞ」

紗織

「 何？ 直慢？」

慧

「 直慢（>_>）」

実はパーク
当てる間
音楽の話て大好きな
歌手でマイナーだから知らないだろ?と
思つて話したら
ファンだったらしく
意気投合したのだ

意外にいい奴で
面白かつたりする
口が悪いのは
照れ隠しのため
（…だと思う）

慧

「 優雅兄貴呼んでくる」

紗織
「ほーい」

楽しいかつたあ

また

話そ

「仲良くなつちやつて」

紗織
「へ

わつ！

優雅君につの間に
後ろに……」

紗織
「優雅
「楽しく話してるとひがひ

紗織
「声かけてくれたらいいのに
あつ
さつき慧がね
優雅君を

呼びに行つたんだよ

てか

いたから

知つてるか…

優雅

「慧?

つか何で呼び捨て?」

紗織

「仲良くなつたからだよ?」

優雅

「ふーん…」

なんか

機嫌悪いみたい…

話をなんか

作んないと…

紗織

「さつきね

慧とスゴく意氣投合してたの！
びっくりしたよお

めれか…」

優雅

一 慧の語はもうい

「後はマイケだけだからやるね？（^_^）」

紗織

わつ／＼＼

ちょつと何？！

何でお姫様だつこ？！」

優雅
「ん」

紗織

「そんなあ～

優雅
「やだね」

私はお姫様だつこで
運行されたまま
次へ行くのでした：

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8992e/>

恋愛メイク

2010年10月9日21時33分発行